自由と不自由 (2)

　ジャズのセッションでは、基本の形をアレンジして順番に演奏する。一度うまくいっても決してそれを定型化しないのだそうだ。つねに形をこわすことで、未知との出会いを求める。ほんものの音楽は神様が降臨するようなものなのだという。

　つまり毎回が枠をこわす挑戦だ。でもそうやって自由に演奏できるのは、お互いが基本ルールや※コードを共有しているからでもある。この場合もまた別の意味で、①枠があるからこそ、安心して枠をこわすことができるのだろう。

　そして、②枠には伝統の枠もある。学生のころに聞いた能楽師の片山清司（現・十世片山九郎右衛門）さんの講演が印象的だった。能の稽古では、とにかく型を覚えなくてはならない。他人の轍を踏むことを強いられるのは、とても苦しい。しかし、世阿弥に「※稽古は強かれ、情識はなかれ」という言葉がある（『風姿花伝』）。いかに自分をゼロにして吸収できるか。そして、自分のイメージを排することではじめて得られるものがある。不自由のなかの自由にこそ、喜びや創造性がある。

　そんなお話だった。つまり、自分独自の表現などと考えるよりも、まずはきっちり枠を身につけることが肝心だ。そのうえで身についた枠を破るとき、はじめて創造がある、ということ。日本の武道や芸能の修業には「守破離」という言葉がある。守る、破る、そして離れる、だから、さらにその先に、枠を意識しないぐらいの究める境地があるのかもしれない。

　考えてみると、わたしたちは知らず知らずのうちに、たくさんの枠に囲まれて暮らしている。所属する社会の常識、学校で教えられた知識、生まれた時代の価値観、既成概念、自分の癖や思考パターン。もちろん、そうした枠があるおかげで、効率よく、しかも安心して社会生活がいとなめる。

　でも、枠のなかだけで過ごしていたら息苦しくなる。そして枠がつねに正しいとも限らない。

　そんなときこそアートだ、と思う。アートには、枠をこわして、新たな価値や新たな物の見え方に気づかせてくれる力がある。それは枠の外にいるだれかに暴力を向けるようなものではない。自分自身がとらわれている枠に気づき、それを内側からこわす力をひきだしてくれるもののような気がしている。

　ほんとうの自由とは、あらかじめ与えられた状態のことではなく、自分で枠をこわす※プロセスにこそあるのではないか。

（齋藤亜矢『ルビンのツボ——芸術する体と心』岩波書店　所収「自由と不自由」による）

※コード…和音。ここではジャズの基本となるコード。
稽古は～…稽古に対しては厳しくあれ、慢心による強情さや頑固さはあってはならない。
プロセス…過程。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ——線①「枠があるからこそ、安心して枠をこわすことができる」とあるが、ジャズのセッションで枠に当たるものは何か。最も適当なものを選びなさい。

ア 基本の形をアレンジして演奏すること。
イ 演奏を定型化せず、形をこわすこと。
ウ 枠をこわし、自由に演奏しようとする挑戦。
エ お互いに共有された基本ルールやコード。

〔　　〕

(2) ——線②「枠には伝統の枠もある」とあるが、能における枠の例として挙げられているものは何か。本文中から漢字一字で書きぬきなさい。

〔　　〕

(3) 筆者の考えに当てはまらないものを選びなさい。

ア さまざまな枠があるおかげで、効率よく社会生活をおくることができるという面がある。
イ アートには、自分がとらわれている枠を認識(にんしき)させ、新たな物の見え方に気づかせる力がある。
ウ ほんとうの自由とは、社会の常識や価値観、既成概念といった枠のなかで過ごすことである。

〔　　〕